

翻刻『寛延三庚午歳旦 新花』

― 寛延三年平砂歳旦 ―

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】

俳諧 江戸座 平砂 米翁 魚川

はじめに

本稿では、平砂編『寛延三庚午歳旦 新花』（横本一冊、寛延三年刊）を翻刻紹介する。底本（個人蔵）は、虫損や染み、汚れが目立ち、保存状態が良いとは言いがたい。しかし、水引で綴じられた原装の雰囲気や辛うじて留めており、本文共紙の表紙や、初丁表に用いられた紅と緑の色摺り（匡郭を紅、「花鳥」の文字を緑で摺っている）も何とか残っている。

また、国文学研究資料館の「日本古典籍総合目録データベース」に拠れば、二世平砂の歳旦は『宝暦十四年甲申歳旦 新花』が関西大学図書館に所蔵されるのみであって、他に伝本があることを聞かない。そこで、江戸座俳諧研究のための基本資料の一つとして、ここに数葉の図版とともに紹介しておきたい。

〈解題〉

平砂（宝永四年（天明三年、七十七歳）は、江戸座の俳人として活躍した人物で、本名は皐月良珍、本姓は石川氏、字は美叔、前号は律佐・其樹。また、別号を解庵・閑花林・新花林と称した。貞佐門で、湖十（二世）編『江戸廿歌仙』（延享二年刊）の作者の一人である。師の貞佐（寛文十二年（享保十九年）の別号が平砂であったため、貞佐を一世平砂、本書の編者を二世平砂とする。

師の貞佐は、本名を桑岡平三郎永房、初号を塩車と言ひ、別号を平砂・了我・桑々畔と称した。其角門の俳人で、沾徳にも親しみ、江戸座の中心となった。門下には、平砂の他に、超波、有佐などの有力俳人がいた。

平砂には『俳諧而形集』（明和九年刊）の著があるが、その巻之二に「そよりととも智恵は振はじ福寿草」という句が「同（寛延）三年庚午」の歳旦として載っている（早稲田大学図書館中村俊定文庫蔵本を参照した）。「智恵」「振」が漢字表記となっているが、これはたしかに本書の巻頭句と同じ句である。

また、『俳諧而形集』巻之二十に載る「自序」には、平砂が自らの経歴を書いている箇所がある。それによれば、祖父（石川氏）も父も医者で、越前の大野藩に仕えており、父は人見竹洞に従学していたという。自分も家業を継承するための勉強していたが、「詞林に交り遊ぶも世態をするの一端なり」と考え、十九歳のときに貞佐に入門した。ところが、ある日、治療に用いる杜仲を刻んでいたところ、誤って左手の中指を傷つけてしまい、その傷のために人の脉を診ることが出来なくなってしまう。そこで、周囲の勧めもあって、俳諧を業とするようになったのだという。

なお、入集者のうち、蝦明子は米翁の別号、すなわち柳沢信鴻（享保九年（寛政四年、六十九歳）である。柳沢吉保の孫で、柳沢吉里

の次男、延享二年に襲封して大和郡山藩主となっている。俳諧は、春來（二世青峨）・米仲門。江戸座の宗匠や大名俳人などと多く交際し、江戸俳壇の重鎮として活躍した。また、湖十・有佐・常仙・旨原・存義・春來・米仲・樓川・紀逸ら江戸座の宗匠の名前に交じって、訥子（沢村宗十郎）・少長（中村七三郎）・仙魚（瀬川菊次郎）ら役者の俳名が見えるのも興味深い。

〈凡例〉

翻刻にあたり、私に句読点を補った。また、異体字は概ね通行の字体に改めたが、一部原本の表記を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たる箇所「」をつけ、（ ）内に丁数と表・裏（オ・ウ）を示した。

底本には、虫損のため解読できない箇所がある。全く読めない箇所は□で示し、傍らに「（虫損）」と記した。また、推測を交えて読んだ箇所にも、同様に「（虫損）」と記した。参考のため、原本の図版を最後に示した。

〈書誌〉

書型……刊本、横本一冊。紙縫三本を用いて綴じる。

表紙……本文共紙。縦一四・九厘×横一九・九厘

題簽……表紙左端、単辺の枠と共に「寛延三庚午歳旦新花」と直接刷る。

本文……每半葉十二行内外。

字高……一一・五厘（第二丁表「そよりとく平砂」を計測）。

丁数……全九丁（但し、本文は裏表紙見返しまで記されている）。備考……第一丁表の匡郭は紅摺り、「花鳥」の文字は緑色摺り。

〈翻刻〉

寛延三庚午歳旦 新花

（白紙）

華鳥華鳥華鳥

花鳥華鳥

花鳥華鳥

庚午歳旦

そよりともちゑはふるはじ福寿草

声のまことのとゞくはつ雞

春の海酒を催す岸出て

春興

沢辺にも寐てあてがふや梅の花

歳暮

年わすれかゝる折にぞ剛の者

雑喉売の平目たふとむ師走哉

狼のおくりあまして年くれぬ

一序歳旦并
守年

いにしへを今に磐戸や明の春

餅搗や重ねてめおの神あつめ

囀りを所望して見ん梅の春

塩ものゝはじめや年の赤鯛

若水や江戸むらさきのひつこぬき

十露盤は愚痴の主ぞ年の暮

母や子の笑ひ声から明の春

鰻喰ふた身はあたゝかし年の昏

「（表）

「（見送）

「（一）

大黒を信ずる事有て

仕合も^虫せし打出の初日哉

又ことし鯨魚押へてくれにけり

蓬萊や亀の尾ならば獵師町

年波や人も順風の走り船

ゆく道を駒に任せん華の春

米春と並ぶや年の暈さし

目の切や亀の甲より明の春

金山のふもとに近き岡見哉

常盤なる我目も青し日の始

囃せたゞ流るゝ年のたつた川

水車年はつ日の影の動きかな

松風に鷹やふりむく江戸の春

ゆく年の人走らせん小笹原

二序^同

ひげや千代富士の綴のかざり藁

年なみのわたり安さや小川町

喰摘はひな鶴求食山路哉

蠟燭に時を知る夜や大み十日

豆ほどな水主も見ゆるや宝船

すゝ掃や昼一遊び鞠の音

年徳や恩を身につむ備前米

とごろまぐ年の尻尾のしまり哉

若駒や手綱たなびく初霞

衣くばり待ばや鱈の国使

買初は妹がゆめや旭山

鼎夫

萬里

長湫

扇賀

其樹

花流

墨川

苔雨

田砂

仙峩

周釣

樹丸

笑斗

「(ウ)

「(オ)

豆蔕や聞てたしなむ国ことば

さはくゝと御慶告るや鳥供

疊さし朧から年のしまり哉

若魚や七人乗の宝舟

金を産む土は肥たり年齒

うらゝかに鶴の羽をのす日の始

松売て見てゆけ江戸の組飾

明たつや鶴も初日の額つき

出来合の女幾人としのくれ

三の朝心の駒の輪乗哉

合串に別れぬ海老や年の昏

わか水や新し橋の子持筋

来る春に箒目付んこまざらへ

人もちみ神とゞまるや鏡台

遅牛の力も淀よとしの闇

三序^同

船に溜る金の華やえ方乗

兼好にさへあつらえや餅薙

書初にうち物かへや金衣鳥

年^虫□^虫り竹は女房が手業哉

蓬萊や秣もてあそぶ青暈

年の尾や宝の市のわらひ声

我物に成すまじたり初日の出

鯨さし鮭にあつかふ師走哉

餅つきや箱根の釜の嘶有

読初^虫や折目正しき持扇

砂汀

百砂

桐砂

晋風

砂明

砂兮

貞写

氏野

律砂

砂雨

砂竹

連砂

張公

「(ウ)

「(オ)

「(ウ)

暁の明星拝めとし忘

四序

書初や富士と名高き筆あたり

酒盛や烏帽子似ふた年忘

醉中に肱を曲しか明の春

松市流年柵

若草の兄とやいはん福寿艸

月と日の末はあかるし大卅日

聳殿の機嫌上戸よ若多びす

臼の底入^レて酒のめ年の暮

花入の青きもありや年の市

橋からは舟をうらやむ師走哉

一元に帰して豊や年の梅

花も実も宝づくしや家の春

きみのよい表間口や明の春

年波や琴師がみせの花筏

百^{〔虫損〕}□^{〔虫損〕}る猫の額や大みそか

蓬萊や櫛笥に富士の高蒔絵

献立の文箱を得たり年忘

鶏旦

古橋^{〔虫損〕}に通ひは白し明の春

はるか恵方へ献る芹

歳旦^{〔任米次〕}

蓬萊や千代の数つむ鶴の嘴

初空の扇と成やふじの山

大紋ではめらるゝ日や福寿草

明そめて豊なりけり人の足

、

五嶽逸

五嶽

為文

、

亡羊

砂各

、

砂谷

訥子

少長

佐丁

砂永

花来

熊文

異川

、

蝦明子

平砂

、

萬里

文川

芦月

路雀

明^{〔虫損〕}て今朝まだ人馴ぬ福寿草

目覚しも猶若やぐや明の春

舞留の四方へ匂ふや花の春

天の戸は神代ながらも明の春

告渡る鶏もことしの発句哉

曇なき御代の鏡や初日影

春興

新花先生、弟に古今庵の号

をゆづりて示すに、花実の事を

以す

花を得て種をまてとや庵の梅

尖立る氣遣ひもなしわかな原

歳暮

仲人のうそつき残す師走哉

荷擔人に梅を持たる師走哉

越^{〔虫損〕}す年も無事日月の長さ哉

年一夜地にはせちかふ星月夜

父母に氣を長うする師走哉

掛^{〔虫損〕}乞^{〔虫損〕}に浴せてくれん鴨の羽

来春の馳走を年の台所

梅柳年の拍子もよかん日

節季候も老もきにけり八重葎

行年の跡や蹄の硯ほり

行年や走る氣もなき琵琶法師

年の尾をしこなしぶりや鰯

年の豆徳利に足をとゞめけり

さらば^{〔虫損〕}年の尾さきにならぶ梅嗅む

桂有

其風

越我

風艸

桐室

花橋

、

墨川

超月

、

蝦明子

女佐鳥

女三鱗

庭台

李琢

漣車

其風

六味

百庵

渭洲

閻如

甲逸庫

甲低哉

水戸

豆

桐室

色に出て笑良こほすや年の梅
 来^ル年の富をふれけり除夜の雪
 鬼は外薫は内へ除夜の梅
 僧のみか連歌師までも走哉
 夏ならばひよんな香もせん年の市
 松立や我も三十にこよひから
 春にあふ琴の調や年ゆたか
 杖の下まはる豊や年の煤
 七ころび八起を待やとしのくれ
 大年や更行川を一またぎ
 止^ム事を得ずに師走や人の足
 鉢植の雪や心の衣くばり
 けふ年を越やよしの、妹背河
 小座敷や思ひのまゝの衣賦
 年木こり車かづくは弟哉
 引^(出)立て餅の艶見る月夜哉
 一年の皺をさとさん古曆
 艸の戸や世を味る年の豆
 肘出してしめすや年の豊さし
 書初の打出の小槌稽古せん
 白売に押やられたる師走哉
 四の五のと事によるべし年の昏
 呷の八町ひゞく師走哉
 海山を門に見てゐる師走哉
 行年を馬に知らるゝ山路哉
 生鱈の塩みちくれば片便
 年の市へ付込馬や春の色

風艸
 花橋
 鰐羹
 洞什
 柴立
 都鹿
 東為
 白平
 黛曉
 秀谷
 味水
 長隆
 鵲翁
 舞雀
 定花
 鯰巴
 文室
 太祇
 緑柄
 藤橋
 鶏口
 律山
 湖十
 紀月
 菊圃
 栖雀
 真一

「
 (ウ六)

「
 (オ六)

商山の師走遊びや小盃
 年の尾や先のつとりと丸頭巾
 世の師走行灯になしとふがらし
 餅つきや我は伏見のおきつねつ
 豆まきやもはや我年人の年
 ゑぼし着た大工頼ん年の豆
 年忘すれば鼠がわらひけり
 いさぎよき夕ぐれのある師走哉
 串柿の化粧もすぎ師走哉
 猿猴の腕の自由や去年ことし
 押やりし衾ぞそこに年の波
 北国の塩も出揃ふ年のくれ
 年^(虫)／＼や餅を筑戸のかきね竈
 簑笠を四十二にせぬ年の市
 除夜の金鴈に結べば飛安し
 浜荻や名はかはりても年のくれ
 何待敷年の雀の藪酒手
 崑弱も榮耀もの也年のくれ
 きろ／＼と目の看板の師走哉
 むつまじき年の一夜を間垣哉
 春待や大根も翌の鏡艸
 書肆が名や艸昏一部の年既に
 鵲や願ひのはしの巢ごしらへ
 暮て行年の拍子や節季候
 よ所にゐて小袖究る師走哉
 大卅日能大の字の叶たり
 年の矢の猪見て矧も浮世哉

栢庭
 翠扇
 有佐
 丈国
 超雪
 雀童
 買明
 杉風
 祇丞
 佐ほ丸
 竹郎
 曉雨
 嘉廷
 中谷
 白清
 蘭十
 常仙
 雪杭
 旨原
 萬里^{魯菊斎}
 羊素
 珠来
 栗揚
 芦月
 石腸
 裏丁
 存義

「
 (ウ七)

「
 (オ七)

「
 (オ八)

むつ言のしばしいやしき師走哉
六十二身も実になるや花の春
一年や^メて雲井の袖日記

いそくと何やらうれし年のくれ
年屑のつもりや田子の浦かけて
年一ッとれば八声でこたへけり

気を付て福を吞うぞ年の昏

光悦の秤目しらず年のくれ

あらわざは童が馴て年くれぬ

それも^(虫損)其神圖取らん年の昏

大根を洗ふて清め年の昏

年波の底をのぞくや湊筒

春にあふ琴の調や年豊

煤掃や夜明に笑ふ顔と貞

行年や田楽法師小脇差

海山の店卸見ん年の市

猿引は猿に越させよ年の坂

から^(蟲損)鮭の御礼申や年のくれ

師走何流わたりの浮世川

鵜の鳥の潜て年の波間より

智恵の輪に心焚て年昏ぬ

喰つみの山築立て待にけり

しれた事をのがさまぐ一年一夜

年の尾をはねるや棚の藤かづら

冬籠押つめられて浮世哉

押つめるほど声のたつ雀哉

年波や人のひたひをよせ所

竹瓦
潮雨
春来

三夕

米仲

故一

湖帆

秋風

東洲

秀億

十家

楼川

東為

仮司

由林^(虫損)

蛇水

渉十

山曉

木啓

五雲

溪梁

旦調

調和

渭北

文川

里郷

紀逸

「(ウ八)

「(オ九)

柏手にまける拍子や神の膳
押合て舟は着けり大卅日

きら星の武士もふる也江戸の除夜

餅花や人にたなびく八重の奥

御飛脚の七里戻りて年の豆

花鳥を囲ふか年の頭陀袋

何所の^(蟲損)□そきこりて空に師走哉

口塩の鰯も名におふ歳暮哉

定紋に千代の鏡や年のくれ

附 娘儲けて其春

羽子の子の初夢聞ばや門の春

初空や最う尻餅を東山

歳暮

さらい込大晦日の煮ばな哉

かゝる身は年の管屋のなかりけり

五序

門松や富士をかたどる四方面

鏡屋のたはらは古き師走哉

岡見する国の宝や桜板

楚江

三笑

再賀

仙魚

畔水

六器

群牛

愛舟

園枝

「(ウ九)

左丸

山雨

左丸

山雨

反宇

、

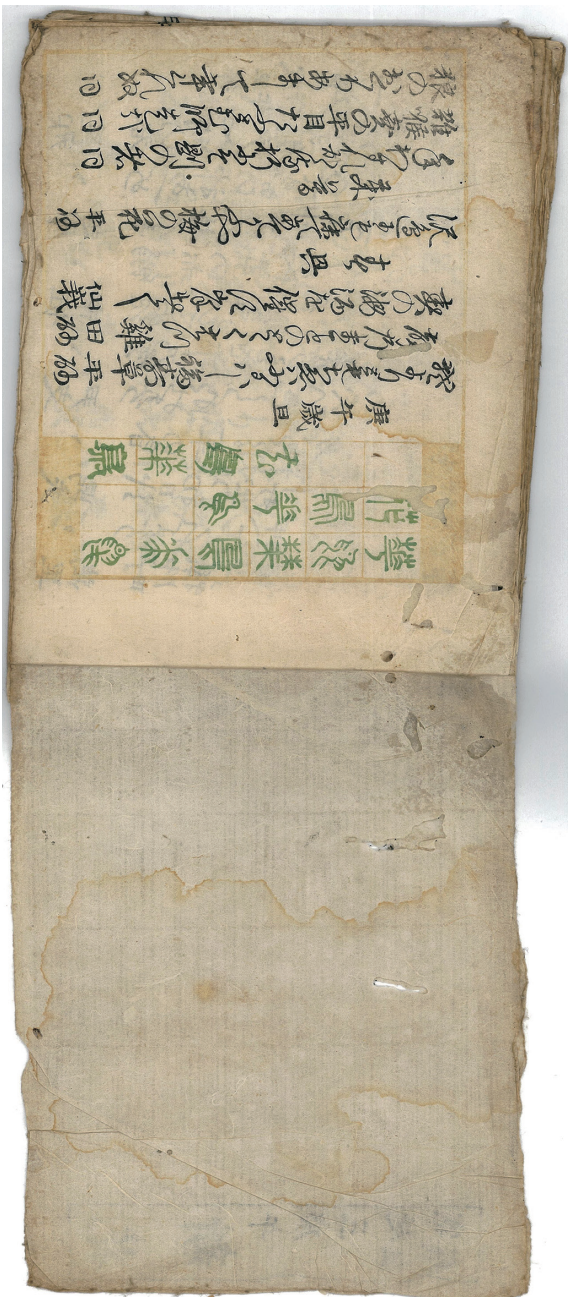
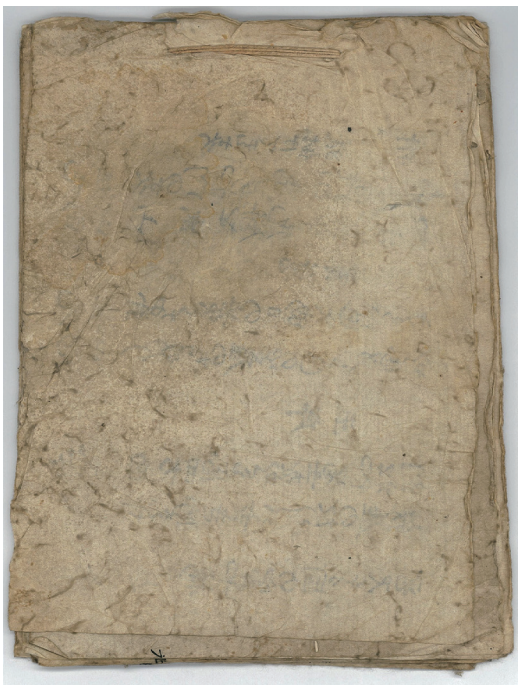
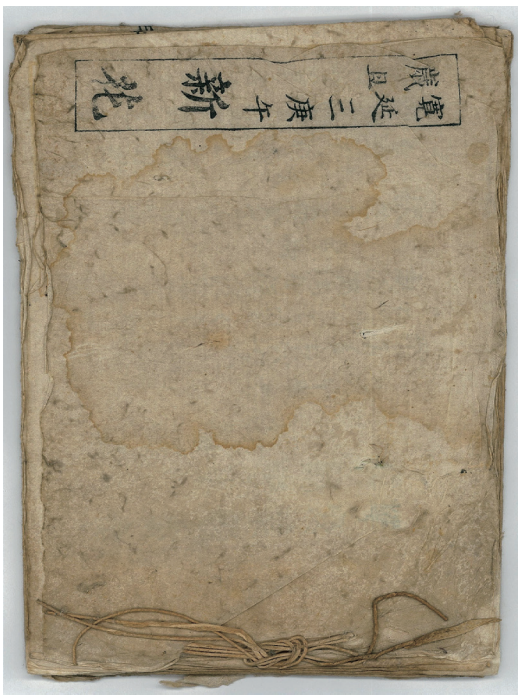
魚川

工

「(裏表紙
見返し紙)

〈付記〉

本稿は科学研究費補助金（基盤研究（C））「人を結びつける文化」
としての俳諧研究」（研究課題番号 26370259）（代表・伊藤善隆）
の研究成果の一部である。



一序 年 歲旦并

いり 磯預今又蟹戸の明の春 昆那
併揚たまひておの津あめ
晴まを空に元人梅を雲
地りもめ事の赤潮
若水如雲むきけ三望 南佐
十番雙魚城の送半乃雲
母やの笑ひきし明時君支
飯喰ふてあまの年の昏
江 打出の初日 鴨武
又 鱧魚押てなもり
蓬萊や電の屋敷 孫作町 萬里

○波々全明風のまを歌
い 人を釣ふ人海の春 長嶺
来着と並ふの雲き
目の切腹は甲より明の雲 扇賀
金山のうにきき雲尺卦
なまや成自もまの日の始 其樹
證せき雲のいふ川
水車土の穀の動きの 北流
松年通の一夜けい
松風又雲のうに江の春 墨川
いひの人もあふ源

二序 同

人との張もまの鏡雲 貞寫
應年の力も浪より 箇

三序 同

船より仙金の華元方 彦野
無好ましくは飾 延
書記もくは金衣鳥 律砂
ひ六重竹の女も業 砂雨
蓬萊や珠のわきま 砂雨
ひの屋の雲の布けの公 砂
残れり哉まの初日 出 砂竹
鯉より蛙あふみ 外
為水や井桐のまの玉の推 連砂

併ま初松招の金乃歌五
際れや初四き括 扇張公
後の明星あわく 忘

四序

書初松招の金乃歌五
師鐵七雲帽き仙く 忘
酔中と恥と曲し 明の夷 禰文
松市 流年 柵
松年の良き人 柵 亡羊
月と日と木と 天妙日
白の底へくはのめく 砂谷

花入の青きもあはくは
 橘、丹を、やむ時、外
 一、元、より、まゝ、は、の、橘
 能く、実を、望み、や、家の、奥、に、
 き、の、い、表、面、に、や、ぬ、乃、藝
 時、平、琴、師、の、の、家、に、
 百日、の、橘、の、影、や、大、に、
 成立、の、家、に、も、く、は、志、
 難、旦、
 青、橘、も、通、か、白、一、時、乃、嘉、
 皇、の、皇、方、一、獻、に、芹、
 平、砂、

無日

稽及通公白一明乃嘉
 有之查方入獄起芥平初

歲旦 任來次

蓬萊千仞の樹を採摘萬里
西望の廟と如かず江山
大彼て木めり高き椿葉中
照る或は空より人の足
臨み龍臺之削波磯雪軒
自是を採集する之の事
蘇圃の四五自中を越え
天の三昧代を以て明力勢
宮城を龍臺と一の空外
畢竟自然成鐵木初日影
抱穂

春丹

[illegible]

歲

[illegible]

